

I. 導入

おはようございます。今日は3月11日です。ご存じのとおり、一年前の今日、大地震と巨大津波が東北地方を襲いました。未曾有の自然災害に見舞われた直後、福島原発事故が起きました。私たち夫婦も、皆さんや世界中の人々と同じように、大地震や津波の様子を伝えるテレビ報道を心が引き裂かれる思いで見っていました。ここにいるほとんどの方は、大阪でこの様子を見られたことでしょう。私たちは銀婚式記念の旅行先グアムでニュースを見ました。

被害状況が次々と伝えられる中、私たちは祈りました。一刻も早く日本に戻らなければと思いました。そこで、旅行を中断して大阪に帰りました。数日間ですできるだけ準備を整え、とにかく東へと出発しました。そして、3月25日、岩手県遠野市にたどり着きました。遠野では、がれき撤去作業や避難所で配布するおにぎりを作るなど、市のボランティアと一緒にいろんなことをしました。けれども、主な役割は、災害支援団体クラッシュの拠点を築くことでした。地元教会や役所とのネットワーク作り、岩手にきてくださるボランティアの受け入れと作業のコーディネートなどです。遠野から戻った後も、カレンは長期にわたってクラッシュ事務所に技術サポートを提供しました。



震災後、OICは被災地支援に努めてきました。義捐金を募り、ジョセフ牧師率いる支援活動チームを石巻に送りました。また、ビーワンをとおしてボランティア活動に参加した人もいます。今後も、さまざまな方法で復興支援に関わっていきたいと思います。

岩手滞在中に、私たちが目にしたものを映像に残しました。また、ボランティアの方々の祈りやコメントもビデオに収めました。これらのビデオは、動画サイト Youtube で Dan4Osaka を検索していただければ視聴できます。ここで、その中のひとつをご紹介します。
(大船渡の動画を流す)



この動画で映し出されているのは、ひとつの市のある場所に過ぎません。しかし実際には、南北400キロの海岸が津波被害に遭いました。陸前高田市のように、市や町全体が壊滅状態となった場所もあります。19,000人以上が死亡またはいまだ行方不明となっています。復興には長い年月がかかることが予想され、福島原発事故による避難区域の住民は元の家に戻るかどうかもわからないままです。



3月11日の^{さんじゅう}三重災害は、誰もが目を覆いたくなるような大惨事です。しかし、未曾有と言われるこの震災も実際は未曾有ではありません。人間の歴史を見ると、悲しいかな、天災や人災は常にありました。地震、津波、台風、竜巻、洪水、戦争、テロ、飢餓、など、さまざまな災害が世界中で毎年起こります。

太古の昔から、人は災害に何度も見舞われてきました。そこで、今朝取り上げたいことは、「災難にどう向き合うか」です。災難に見舞われたなら、どんな反応をするでしょう。神に怒りの拳をぶつける。罪を悔い改めてひざまずく。天罰やたたきだと言う。考えてもしょうがないとあきらめ

る。さまざまな心情に翻弄されるでしょうが、感情は私たちを答えへと導いてはくれません。悩み苦しむ時、頼るべき最善の場所は聖書です。

聖書の中で、ヨブ記と哀歌というふたつの書巻の主題は、クリスチャンが災害をどう捉え、どう反応するかについてです。このふたつをしっかりと読んで学ぶことをお勧めします。ヨブ記は、ひとりの人に起こったできごとをとおして、この問題を取り扱います。ヨブは、誰よりも正しい人だったのに、悪魔の標的となり、悲しみや苦しみを味わわなければなりませんでした。

それとは対照的に、哀歌は、国全体に起こったできごとに対する反応を取り上げます。哀歌が書かれたのは、バビロン帝国の軍勢がイスラエルに攻め入り、エルサレムを破壊し、ユダヤ人を捕囚として捕えた直後です。これらの出来事は、紀元前 586 年に起こり、ユダヤ人の 70 年の捕囚生活がここから始まりました。エルサレム陥落は、町が破壊され、多くの人々が命を奪われる大惨事でした。

聖書には、私たちは皆罪人で、罪は死に至るとあります。しかし、災害や苦難が必ずしも何らかの罪によってもたらされた直接的な報いではないということは、ヨブ記やイエスの教えが明らかにしています。ある人、またはある国が苦難に遭う時、他の人や国より罪深いからだと決めつけることはできません。ただし、エルサレム陥落の場合については、それが神の民に対する裁きであったことがはっきりと記されています。預言者たちの警告があったにもかかわらず、民が忌まわしい偶像礼拝を捨てようとしなかったからです。それでも、哀歌の中心となるテーマは神の愛です。哀歌 3:22-26 は、このような言葉で神の愛を語ります。

3:22 主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない。

3:23 それは朝ごとに新たになる。「あなたの真実はそれほど深い。

3:24 主こそわたしの受ける分」とわたしの魂は言い／わたしは主を待ち望む。

3:25 主に望みをおき尋ね求める魂に／主は幸いをお与えになる。

3:26 主の救いを黙して待てば、幸いを得る。

神は裁きをくだされましたが、癒しも与えてくださいました。それから 2,500 年間経ちましたが、ユダヤ人が石や金の偶像のとりこに再びなったことはありません。裁きは厳しいものでしたが、愛によってくだされた正しい裁きでした。そして、神の民から偶像礼拝を根絶するという目的が果たされました。

残念ながら、この出来事によってエルサレムに長い平和がもたらされるというわけにはいきませんでした。バビロン帝国によるエルサレム陥落の約 650 年後、紀元 70 年に、今度はローマ帝国によって倒されました。この時も、それは神の裁きでした。イエスがこの世に来られた時に、ユダヤ人がこのお方を受け入れなかったことへの裁きです。イエスは、ルカ 19:41-44 で、エルサレムの破壊について預言しておられます。

II. 聖書朗読 ルカ 19:41-44 (新共同訳)

19:41 エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、 19:42 言われた。「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら……。しかし今は、それがお前には見えない。 19:43 やがて時が来て、敵が周りに堡壘を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、 19:44 お前とそこにいるお前の子らを地にたたきつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、神の訪れてくださる時をわきまえなかったからである。」

III. 教え

神が人となって来られたイエスは、エルサレムにいる神の民のところ



に来られました。けれども、人々はこのお方を受け入れませんでした。神が来てくださったとは認めず、奇跡によるはっきりとした証拠を退け、来たるメシアについて書かれた多くのみことばの預言を信じませんでした。しかし、この預言でイエスがおっしゃったことを信じて理解した者もいたようです。イエスの言葉を信じた人たちは、エルサレムが攻め入られる前に町を出たという記録があります。

聖書には、災難が神の裁きだという場合もあると明らかに記されています。しかし、どの場合においても、まず預言によるはっきりとした警告があり、その後に裁きがあります。また、愛をもって裁きがくだされ、救いの目的と計画がそこにあります。41節にお気づきでしょうか。(ルカ 19:41)「エルサレムに近づき、都が見えたとき、イエスはその都のために泣いて、」ここに神のみこころがあらわされています。イエスは事実を述べられましたが、同時に、これから起ころうとする悲しみを思って涙を流されたのです。イエスは、この人たちがまもなくご自分を退けて拷問し、十字架につけるとご存知でした。すると、裁きがくだります。正義が果たされるためには、それが必要だからです。そうであっても、イエスはこの人々のために泣かれました。

イエスは、私たちの苦しみすべてを分かち合い、悲しみすべてを理解し涙してくださいます。私たちの神は、私たちが苦しむのを遠くから眺めているお方ではありません。災難に見舞われる時、すぐそばにいてくださり、ともに悲しみ泣いてくださるお方です。国に大惨事が起こる時、イエスは泣いてくださいます。敬虔な人のためにも、そうでない人のためにも泣いてくださいます。それは、主がすべての人を創られた創造主であり、一人残らず愛しておられるからです。

神は罪を裁かれます。神が正しいお方だからです。また、神は、そこに多くの人々の祝福と救いという収穫があるなら、ヨブのように善良な人が災難に襲われるのを許されます。神は不公平なお方ではありません。ヨブの場合、苦難の目的が果たされると、神の御名のために苦しんだ忠実なしもべに、神は豊かな報いを授けられました。災難は苦しいものです。けれども、どれほどの不幸でも、何も失ってはいないのです。神がすべてをご自身の目的のために用いて、多くの人を救いと永遠の命という喜びに導いてくださるからです。

この世の苦しみは、すべて罪の結果です。それは、自分の罪と直結した結果である場合もあります。けれども、多くの場合は、何千年も罪で汚され墮落した世の中に生きている結果なのではないでしょうか。しかし、これ以上もないほどの災難の中でも、神はともにいてくださいます。ともに泣き、世界中の多くの人々の救いという大義のために苦しみを用的方法を見出してくださいます。

それでも、悲しみや苦しみがすぐに癒えるわけではないので、神は残酷なお方だと言う人もいられるでしょう。しかし、考えてみてください。神が間違っている、神は罰せられるべきだ、と思うなら、神はすでに罰せられたことを思い出さなければなりません。この世にあふれる苦しみに、神は心を常に痛めておられます。そして、イエス・キリストという人のかたちで、神は人の手による死刑という苦しみを忍ばれました。イエスは罪のないお方で、この世の罪のために十字架にかかることを自ら選ばれたので、通常、あまりこのような言い方はしません。しかし、神に腹を立てている人がいるなら、神はすでにこの世の罪のために死の苦しみを受けられたことを知るべきです。



神の愛はとてつもなく深く大きいのです。神は私たち一人一人と強い絆で結ばれたいと願われました。それで、全宇宙と人類を創られました。私たちの罪の代価を払うために十字架上で死ななければならないことをすでに知っておられたにもかかわらずです。十字架の苦しみがどれほどか、私たちにはなかなか理解することができません。肉体的な苦しみは、ほんの一部に過ぎないのです。十字架で、イエスはこの世の罪の重荷をすべて負われました。すべての悲しみ、苦しみ、不義、暴力、怒り、戦争、天災と呼ばれるものすべて、そのような罪の重荷や墮落した世と罪が受けるべき報いが一挙にイエスの肩に乗せられ、それを背負って十字架で死なれたのです。イエスは贖いのわざを完成してくださいました。私たちがイエスを信じる信仰によって、罪と死から解放されるため

です。

では、ヨハネ 11:32-37 を見てみましょう。この箇所は、イエスがラザロを死からよみがえらされる直前の場面です。

IV. 聖書朗読 ヨハネ 11:32-37 (新共同訳)

11:32 マリアはイエスのおられる所に来て、イエスを見るなり足もとにひれ伏し、「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」と言った。
11:33 イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのを見て、心に憤りを覚え、興奮して、11:34 言われた。「どこに葬ったのか。」彼らは、「主よ、来て、御覧ください」と言った。11:35 イエスは涙を流された。11:36 ユダヤ人たちは、「御覧なさい、どんなにラザロを愛しておられたことか」と言った。11:37 しかし、中には、「盲人の目を開けたこの人も、ラザロが死なないようにはできなかったのか」と言う者もいた。

V. 教え

マリアと他の人々は、イエスがもっと早く来て、ラザロを癒してくださったなら、ラザロの死を未然に防ぐことができただろうと信じていました。ラザロが病気で倒れた時、使いの者がイエスのところに行って、急いできてくださいと懇願しました。イエスは遠くにおられたわけではありません。ラザロがまだ生きている間に駆けつけることはできたはずですが、しかし、イエスは故意にラザロが死んだ4日後まで行くのを遅らせました。みんなは早く癒してほしいと願いましたが、イエスは別のご計画をもっておられました。イエスは、ラザロを復活させると弟子たちにあらかじめ言っておられました。イエスが親しい友人のラザロに病氣と死の苦しみを味あわせたのは残酷だと思う人もいるかもしれませんが、しかし、イエスはラザロを奇跡的に復活させることを前もって知っておられました。また、ラザロが生き返ったという証によって、多くの人が信仰をもって救われることもご存じでした。奇跡を起こすのを少し遅らせ、少しの間苦しみを受け入れることで、更に大きな奇跡となり、なおいっそう神に栄光がもたらされ、もっと多くの人々が救いと永遠の命へと導かれたのです。

イエスはすべてを知った上で、ラザロが死んで4日後まで計画的に待たれました。そして4日後、ラザロは墓に眠り、家族や友人が悲しんでいます。しかし、彼らの悲しみは、人々の救いのために用いられることで報われるでしょう。その収穫を考えれば、苦しんだ価値があったと思えます。しかし、ラザロの話の中にある箇所に注目してください。**ヨハネ 11:35 「イエスは涙を流された。」**(絵画マーク・スピアーズ作) ラザロの死がもたらした悲しみは、まもなく喜びと賛美に変えられようとしていました。イエスは、ラザロを生き返らせようと、彼のもとへ行かれる途上でした。それでも、「**イエスは涙を流された。**」のです。



あなたはイエスを信じていますか。もしそうなら、どんな苦しみや悲しみ、悩みがあろうとも、それは一時的なものだと確信できます。また、神がその一時的な苦しみを良いことのために用いてくださると信頼できます。しかし、神があなたの苦しみを分からないお方ではないという事実にもっと慰められるのではないのでしょうか。イエスはラザロのために泣かれました。イエスはエルサレムのために泣かれました。イエスは私たち一人一人のために泣いてくださいます。私たちはひとりぼっちで苦しんでいるのではないのです。イエスがともにおられます。そしてすべての悲しみを分かち合ってください。

国家的危機であろうと、個人的な不幸であろうと、なぜそんなことが起こったのか、ほとんどの場合、理由はわかりません。それぞれの出来事に対する神の目的やご計画は、いつも神秘のベールに包まれているようで、霊的な世界のことが私たちにわからないように隠しているようです。そ

れも、私たちを守るためではないかと思えます。けれども、わかっていることもあります。私たちの神イエスは、ともにいてくださいます。そして、私たちの重荷を背負い、悲しみを分かち合ってください。イエスは私たちとともに涙してくださるのです。

そして、神の愛が確かなものであることを私たちは知っています。そして、神を愛する人々のために、神がすべてのことを益として働かせてくださることを知っています。そうならば、**箴言 3:5**の「**心を尽くして主に信頼し、自分の分別には頼らず**」というみことばを自分のものとしてしっかり握りしめる勇気が与えられるでしょう。

神は、サタンがヨブを苦しめるのをお許しになりました。ヨブの信仰が本物と証明され、聖書の中で多くの人々への証とされるためです。そして、ヨブの災難が去った後、神はヨブの忠実さに報いてすべての祝福を2倍にして返されました。ヨブ記を注意して読めば、ヨブと子どもたちに永遠の命まで約束されていることがわかります。神の御子イエスは、ラザロが苦しんで死ぬのを許されました。また、ラザロの家族が4日間ラザロの死を悼むのを許されました。しかし、イエスはラザロを新しい命へとよみがえらせ、ラザロと家族に大きな喜びを与えられました。イエスはまた、このことをとおして復活の根拠を確かなものとされました。それによって多くの人が信仰と救いへと導かれました。

神はエルサレムの罪に対し、町の破壊という形で一度ではなく二度も裁きを下されました。しかし、使徒3章には、ペトロのこのような言葉が記されています。「**3:19** だから、自分の罪が消し去られるように、悔い改めて立ち帰りなさい。 **3:20** こうして、主のもとから慰めの時が訪れ、主はあなたがたのために前もって決めておられた、メシアであるイエスを遣わしてくださるのです。 **3:21** このイエスは、神が聖なる預言者たちの口を通して昔から語られた、万物が新しくなるその時まで、必ず天にとどまることになっています。」

失われたと思っていたものが、イエスの訪れとともに回復されます。それは、イエスご自身と預言者たちが約束したとおりです。それは、エルサレムとユダヤの国ももちろん含まれます。実際、現代の私たちはイスラエルの回復を目にしています。預言者によって語られた回復です。けれども、今起こっている回復は、偉大なる最終的な回復ではありません。それは、イエスの再臨のときに起こります。この約束は確かなものです。イエスは再びやって来られ、すべての人に癒しと回復をもたらされます。

VI. 結び

この世では、私たちは悩み悲しみがあります。泣いたり嘆いたりします。しかし、イエスは私たちとともに泣いてくださいます。そして、時が満ちれば、再び来られ、すべてのものを回復してください。そして、**黙示録 21:1-4**の約束が成就するのです。「**21:1** わたしはまた、新しい天と新しい地を見た。最初の天と最初の地は去って行き、もはや海もなくなった。 **21:2** 更にわたしは、聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意を整えて、神のもとを離れ、天から下って来るのを見た。 **21:3** そのとき、わたしは玉座から語りかける大きな声を聞いた。『見よ、神の幕屋が人の間にあって、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、 **21:4** 彼らの目の涙をことごとくぬぐい取ってください。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。』

私たちの主、神であるイエスは、私たちの涙をことごとくぬぐい取ってください。そして、最後にご自身の涙をぬぐわれるのではないかと思えます。私たちの痛み悲しみが癒され、涙の存在がなくなるとき、神の涙も止まるからです。

祈りましょう。